

出会いは世界を広げていく

交流会を通して

第4回

土肥いつき DOHI ITSUKI

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

キャンプカウンセラーの経験

6月号には、大学時代に経験した、はじめての「場」づくりの経験を書きました。ただ、当時はあまり意識していませんでしたが、その「場」づくりに影響を与えていたのは、おそらくは5月号に書いたグループ活動やキャンプの経験だと思います。そこで今号からしばらく、わたしにとってのキャンプの経験を書こうと思います。なお、ここでいうキャンプは、家族や友だちと楽しむキャンプではなく、いわゆる「組織キャンプ」というものです。日本キャンプ協会によると、「組織キャンプ」には、「①意図、目的を持って行われること」「②組織的に行われること」「③立案から実施までのプロセスを重視すること」「④指導者が存在すること」「⑤キャンパーを理解していること」「⑥自然環境と野外での生活や活動があること」の6つの要件があるとされます^(注)。わたしが小学校時代に参加していたキャンプも、組織キャンプに分類されるものでした。わたしは組織キャンプにかかわる中で、子どもたちと生活をともにしたり、プログラムの組み立てにかかわったり、さらにキャンプの裏方をするなど、さまざまな役割を担当する機会を得ました。こうしたひとつひとつの経験が、現在の交流会の運営方法、さらには担任としてのクラスづくりや、授業をする際の集団づくりに大きな影響を与えています。

わたしは大学時代の夏休みにキャンプ場でボランティアをしていました。しかし、教員になるとともにボランティアはやめてしまい、キャンプと無縁な生活を送っていました。ところが、教員になって数年たったある日、キャンプリーダーの先輩から「小学校高学年対象の『やまびこキャンプ』というのがあるんだけど、手伝ってほしいか」という誘いがありました。もう一度キャンプをしたいと思っていたわたしは、その誘いに乗ることにしました。

やまびこキャンプの組織は、総括責任者のキャンプディレクターのもとに大きく「マネジメント系」と「プログラム系」のふたつの役割にわかれていました。前者はキャンプ全体の裏方を担当しており、マネー

メントディレクターと呼ばれるチーフのもとにマネジメントスタッフがいました。大学時代のキャンプ場でのボランティアはマネジメントスタッフで、子どもたちと接する機会がほとんどありませんでした。一方、後者はプログラム進行を担当し、プログラムディレクターと呼ばれるチーフのもとに子どもたちと生活をともにするカウンセラーがいました。かつて小学校の頃に「リーダーになりたい」と思った役割はカウンセラーでした。そして、はじめてのやまびこキャンプでわたしに与えられた役割はカウンセラーでした。

通常、キャンプにはさまざまなプログラムが用意されています。この年のやまびこキャンプでは3泊4日のうち、初日にはキャンプファイヤーが、3日目には「スタンツ」と呼ばれる寸劇がありました。ただ、2日目はなんのプログラムも用意されていませんでした。わたしは、このフリーの1日をどのように過ごすかがグループづくりの成否を決めると考えました。そして、カウンセラーとしてなにをすべきか考えました。

キャンプ本番、わたしは子どもたちを盛り上げることに専念しました。みんなでグループの名前を決め、グループの旗をつくり、グループの結束を深めていきました。勝負の2日目は、みんなでキャンプサイト内を探検しました。「鳥を捕まえよう」と呼びかけ、罟を仕掛けてみたりもしました。スタンツにもみんなで全力でとりくみました。わたしは4日間のキャンプの間、とにかくメンバーの先頭に立ってみんなを引っ張り続けました。最終日の解散の時、メンバーは充実した顔をしながら別れを惜しんでくれました。はじめてのカウンセラーは、おそらく成功でした。

ただ、自分の中にはなんとなくやもやしたものがあつたことを、今も覚えています。それは「カウンセラーの成功という自己満足のためにメンバーを使ったのではないか」という疑問でした。おそらくはこの疑問こそが、その後のわたしの「場」づくりに大きな影響を与えたのではないかと思います。そこで、次号には、その後のキャンプ経験を書こうと思います。